

# 第126回

## お菓子メーカーが提供した 歌謡文化の新たな土壌

東京五輪が開催された前年の昭和38年は、現在のクールジャパンを代表するアニメ文化の原点、国産テレビアニメが次々に誕生した歴史的な年でした。同年1月からフジテレビ系で『鉄腕アトム』の放送が開始され、このアニメ版の主題歌（詞・谷川俊太郎、曲・高井達雄）は日本中の子供に親しまれました。

提供していた明治製菓の「マーブル、マーブル、マーブルチョコレート」（詞・山上路夫、曲・いずみたく）の軽快なCMソングに乗せられ、子供だった上原ゆかりがボンと開ける円筒型チョコを購入、封入されたアトムシールを下敷きに貼付し、翌日、学校でこれ見よがしに机の上に置いたりしたものです。

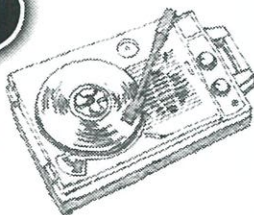
『鉄腕アトム』の成功に刺激され、同年10月には江崎グリコ提供の『鉄人28号』がフジテレビ系で開始。日本における「CMソングの父」であり、人気コマソンを連発していた三木鶏郎が作詞作曲した主題歌は、歌の最後に「グリコ、グリコ、グーリ

ーコー」とスポンサー名が連呼されるように工夫されていました。翌11月には森永製菓提供の『狼少

### 名曲カルテ

# 昭和歌謡と いつまでも

堀井六郎  
絵 松本浦



年ケン』がNET系に登場。「ポバンバンボンボンボンバババ」というアフリカ系音楽のようなスキヤットで始まる主題歌（詞・大野寛夫、曲・小林重星）は、若手CMソング作家として売り出し中だった小林の傑作で、10年ほど前にも森永ではなくロッテがガムの新商品「フィッツ」の発売に合わせ歌詞を変え、CMソングとして使用しています。踊っていたのは、佐々木希、佐藤健、その後も広瀬すずなどが登場し、アニメ草創期に育った世代の目と耳を楽しませてくれました。

同じ11月からはロボット探偵物の『エイトマン』の放送が開始。克美しげるが歌った主題歌（詞・前田武彦、曲・萩原哲晶）が不祥事によって聴けなくなったのは寂しいですね。アニメ主題歌やスポンサーのCM

に関わる制作陣を振り返ってみると、ここをステップに、後日、昭和歌謡

の顔となった人たちが少なくありません。明治のアルファチョコレートのCMはマーブルチョコと同じ山上路夫&いずみたくコンビで作られましたが、このCMを膨らませてできたのが、佐良直美のデビュー曲『世界は二人のために』でした。

山上路夫はまだ20代、いずみたく、谷川俊太郎、小林重星、前田武彦たちにしても30代前半という若さでした。アニメ主題歌はメジャーなレコード会社の専属作詞作曲家の手を借りず、スポンサーと広告代理店が主導となってCM作家や若い人材を登用、レコード会社の古い体質に縛られない自由な発想と新しい感覚で創作されていきました。子供たちにとって新鮮だった理由はそこにありました。

歌謡界におけるその後の活躍について、山上、いずみは言うに及ばず、前武は『夜のヒットスタジオ』の名司会で貢献、小林は『北の宿から』（歌・都はるみ、詞・阿久悠）で昭和51年の賞という賞を軒並み獲得、三木鶏郎は自身のグループからすでに永六輔らを輩出、三木の弟の鮎郎は『スター千一夜』『日本レコード大賞』の司会者として番組の顔でした。